

2022年9月2日 園内研修 ふりかえり

対話者：西村拓生氏（立命館大学）

鮫島京一氏（連合教職大学院）

1 | 「分散登園」実践をふりかえって

2 | 自分達の保育実践を組織としていかにして創っているのか

研修の目的

- 1 | 1学期の学級形成を経て、2学期始まりのこの時期に学級の半数ずつが登園する「分散登園」を設け、学級の仲間や環境との出会い直しを目的とする期間を設けている。その分散登園で子供達と過ごし、感じ考えたことについて対話し意味を生成する。
- 2 | 「私達はどうありたいのか」について、異質な他者との対話から自分達の実践を取り巻く営みについて理解を深める。

参加者

西村拓生 教授（立命館大学）

鮫島京一 准教授（連合教職大学院）

本園教諭 8名

「分散登園」

少人数保育を実施することで、
新学期のスタートの時期に
子ども同士の出会い直し、教師や友達関係の再構築、
環境との出会い直しを意識する

対話内容 抜粋

分散登園で、11人の保育よりも「22人の方が
やりやすい」と感じたのはなぜか？
（実践1年目の教師の声）

- ・11人の保育では、自分と子どもとが「線」でつながる感覚が出てきた
→少人数だからこそ、子供の思いや声が聞こえてくる
→聞こうとしてしまう
すると、集団を進められなくなる
→22人の方がぐって進められる
- ・実践者になって、「進めないといけない」感覚がある
本当はとどまっても大丈夫なこともあったのではないか

分散登園では
いつもの倍くらいの保育時間に感じる
（4歳児担任）

- ・「あれ？まだこんな時間？」という感覚がある
→子どもの人数が少ない分、教師がゆっくり援助できる
→いつもはあちこちに広がる子どもの遊びを見て回る、
走り回っている感覚がある
いかに普段は気持ち的に忙しいか、ということか？
- ・逆にあっという間だった（5歳児担任）
→少人数だからこそ集中して目的をもって取り組んでいたのでは

本園では
「絵の具」をどのように捉えているのか？

- ・3歳児
絵の具と子どもとの出会いは「感触」「感覚」
「気持ちいい」「きれい」など、絵の具と出会うことで
自分がどう感じているのか、を大切にしたい
- ・発達的に技術を身につける、という対象ではなく、
伸びやかに自分を出す、周囲を感じる、教材
- ・なんのために「絵の具」なのか？
→「絵の具」実践について対話することで、
自分達の保育文化について理解していく

園固有の文化 と 実践を支える文化

- ・ 教師と子どもの関係性と教育力
担任教師に子ども達が「似てくる」
→ 教師をモデルとして学んでいく子ども達
教師が「どうありたいのか」を関係性の中で学んでいる
- ・ 持続可能な実践であるかどうか
→ 自分がどうありたいか、どんな実践であるかを語ることが
自己を再構成し、文化を創っていく
チームであるためには、共通のヴィジョン・文化が大切

「今、ここにあなたが1年目でいてくれる
ことに、組織として学べることもある」
(実践1年目の教師の声に対して)

- ・ 実践1年目の教師は、
「早く大きくなりたい。早きベテランになりたい」と語る。
→ これまでのように、経験知だけが専門性を高めるのではなく、
その組織が今、どのようにそれぞれの先生の持ち味を活かして
その差異を大切にしながら有機的に複雑に動くことで、
組織として専門性を高めていくのか、を大切にしている。
私たちは、あなたが実践1年目だからこそ、学べていることが
たくさんある。
この組織にあなたが1年目にいることはとても重要。